

しずおか

Shizuoka Junior High School Attached to the Faculty of Education of Shizuoka University

静岡大学教育学部
附属静岡中学校
2026.SUMMER

No. 96



学びをひらく契機

国語科の主張

1. 教科で育みたい人間像

豊かな言語感覚をもつ人

2. 教科で願う学び

言葉を吟味し言語感覚を磨くことと、言葉を介して考えや価値観を更新することと、それらを往還すること

言葉は世界を変える力をもっています。私たちは、言葉を吟味し、言語感覚を磨き、自らの考えや価値観を更新し、ものの見方を豊かにしていく子どもの姿を大切にしています。このような学びを育む授業づくりを多くの先生方と考えていければ幸いです。(若林 卓・井上由貴・三島将弘)



社会科の主張

1. 教科で育みたい人間像

社会に参画し、創り続ける人

2. 教科で願う学び

課題解決をめざして、根拠に基づいた自分なりの考えを、他者と練り上げながら、よりよい社会の構築に向けて発展させていくこと

私たちが生きる社会は、急速に変化しており、価値観の違いや利害関係による対立が深刻化し、合意を導き出すことが難しくなっているのかもしれない。そうした状況だからこそ、私たち社会科部は、未来に希望を抱き、“よりよい社会”を自分たちの手で創りあげていく人を育てていきたいと考えています。子どもたちが社会の出来事に向き合い、「すべての人にとって最善となる社会のあり方」について語り合い、問い続けられるような社会の授業を目指して実践を重ねていきます。(菅原 晃・井村和仁・黒柳友義)



理科の主張

1. 教科で育みたい人間像

「科学のまなざし」をもつ人

2. 教科で願う学び

探究心をもち、自然の事物・現象のとらえ方を発展・深化させること

「科学のまなざし」をもつ人は、自然の事物・現象をよく見つめ、そこから目に見えない本質に迫り、感動したり、畏敬の念を抱いたりする豊かな心をもっています。子どもたちが自ら立てた問いに向かって、探究への没頭と科学的な対話を積み重ねながら、「知性」と「感性」を育んでいく授業をめざしていきます。(加藤理道・糟屋晃久)



音楽科の主張

1. 教科で育みたい人間像

音や音楽のよさを分かち合う、心豊かな人

2. 教科で願う学び

音や音楽を感性でとらえ、仲間と語り合いながらそのよさを分かち合い、支えられた知性をもとに感性を広げていくこと

音楽と出会うとき、人は言葉を超えた感情に揺さぶられます。美しい響きに息をのむ瞬間、仲間と奏でた音に胸が熱くなる瞬間。その体験こそが、子どもたちの感性を育て、世界の見え方を豊かにしていきます。私たち音楽科は、多様な音楽文化との出会いと対話を通して、音や音楽のよさを分かち合い、心豊かに生きる人を育てます。(清水美奈)



美術科の主張

1. 教科で育みたい人間像

自分も相手も大切にしながら、自分らしく未来を創造していく人

2. 教科で願う学び

感性を豊かに働かせながら、自分の想いを表現するために、造形的な視点をもって試行錯誤し、自分らしさを追求しながら新しい価値を見いだしていくこと

今年度最初の授業での出来事。「美術って、やらなくても困らないけれど、やったほうが人生楽しいよね」と話してくれた子がいました。子どもたちにとって、美術を学ぶことが人生を豊かにすることにつながってほしい——そんな思いをあらためて感じた一場面でした。これからも、子どもたちの想いに寄り添いながら授業づくりをしていきます。子どもたち一人一人の“らしさ”を感じていただけたらうれしいです。(望月理恵)



数学科の主張

1. 教科で育みたい人間像

論理的かつ客観的に解決にあたる人

2. 教科で願う学び

数や図形、統計、関数の概念を共に再構築していくこと

子どもたちは問いを解決する過程において、数理的に考えたり、これまでの学びとつなげたり、新たな切り口から考えたりするでしょう。私たちが願いや思いを込めて授業を構想し、実践すると、子どもたちは素敵な姿を見せてくれます。子どもたちとともに楽しむ授業づくりについて、一緒に語り合いませんか?(齋藤慶一・勝又 俊・西谷聡一郎)



英語科の主張

1. 教科で育みたい人間像

言葉で心通わせる人

2. 教科で願う学び

英語を通して心通わせるかわりを積み重ねること

子どもたちは自分の思いを伝えるために使用する言葉の選択にこだわったり、相手の言葉に込められたメッセージを味わったりしながら、他者と心から理解し合うための視野や考え方の幅を広げ、創意工夫をこらしたコミュニケーションを図っていきましょう。子どもたちの「伝えたい」「知りたい」という思いをかき立てるような授業をめざします。

(吉田龍弘・松永有未・小野瑞歩)



新研究のはじまり

教科の学びを通して、自分と自分を取り巻く世界とのつながり方が修正・洗練・統合されることを実感する(「学びの自覚」)過程で子どもの中に何が起こっているのか。脈々と受け継がれてきた「人間形成に寄与する学び」を大切にしながら、新たな研究がはじまっています。



各教科の主張

保健体育科の主張

1. 教科で育みたい人間像

運動や健康とともに生きる人

2. 教科で願う学び

運動や健康に関する事象に対して、問いを立て、思考と体現を繰り返しながら納得解を見いだしていくことで、見方や考え方を豊かにしていくこと

運動や健康には、する、みる、支える、知るなど多面的な関わり方があります。

保健体育科では、運動や健康に関する事象や当たり前に立ち止まり、問い直し、自ら考え、納得解を見いだす過程を繰り返す授業実践を行っています。そして、子どもたちが自身の価値観を更新して運動や健康に対する見方を広げるとともに、生涯にわたって豊かなスポーツライフを選択し、運動や健康に親しむ人間に一步ずつ近づいていく姿を願っています。(榛葉龍太郎・勝又陽一)



学校保健

子どもたちが授業で学ぶ喜びを感じたり、行事や日々の生活で幸せを感じたりするために養護教諭は何ができるでしょうか。子どもたちはもちろん、共に子どもを育てる教職員に対して行う養護教諭ならではのアプローチを考えていきます。



(金子さやか)



外国の虹は、7色じゃない!?

校長 酒井 宣幸

「いやいや、虹は7色でしょ!？」とお考えの方。私もこの話を聞いたときに、そう思いました。「虹は『赤橙黄緑青藍紫』の7色だ」と子どもの頃に習ったような覚えがあります。しかし、虹の色は国によって異なるようなのです。なんと「虹は2色」ととらえている地域もあるそうですから、驚きです。科学的に考えて、地球上なら虹の色はどこでも同じはずなのに、国や地域によって虹の色の認識に違いがあるのは、どうしてでしょうか?

諸説あるようですが、一つご紹介いたします。実は、虹が7色と決めたのは、あのアイザック・ニュートン。ニュートンが生きていた時代は音楽が重要な学問の一つで、自然界のあらゆるものは音楽とつながっていると考えられていたそうです。そこで、ドレミ～シの7つの音階と同じように、虹も7色と考えるのが正しいと唱えたとのこと。現在、ニュートンが生まれたイギリスでは虹は6色と考えられています。フランスやドイツ、中国では5色、ロシアや東南アジア諸国では4色、南アジアやアフリカの一部の部族では2色だともいわれています。もちろん、その地域の人たちが実際にその数の色しか見えないわけではなく、色を示す言葉が日本ほど豊富ではないから、こういうことになるのだとか。つまり、言葉や知識がなかったり、見ようとしなかったりすると見えるものも変わってしまうということが言えるのではないのでしょうか。

さて、我々教員は、子どもたちの学びの姿が見えているでしょうか?

附属静岡中学校では、人間形成に寄与する学びを大切にしながら、脈々と続けてきた実践研究を土台に、本年度、新研究「学びをひらく契機」をスタートさせました。『「学ぶ」とは、どういうことなのか?』『「学び」が起きている過程で、子どもたちの内面には何が起きているのか?』をじっくり探ろうとする営みになるのかなと思います。このテーマは伝統的ではあるけども、子どもたちとともに授業をつくっていく上で、今一度、私たちが考えるべきことを明らかにする研究に進化・深化していくものと確信しています。

新研究をスタートするに当たり、今後も研究を力強く推進するために、研究協議会を通して忌憚のないご意見をいただきたいと願っております。多くの先生方のご参加をよろしくお願いいたします。

学びをひらく契機 ―わかれようとする子ども― 研修部長 若林 卓

「ずっと難しくて書けないと思っていた漢字を書こうと思ったら書いてしまったとき、嬉しいというかなんか寂しい気持ちになる。」

(ある中学2年生の「夏休みの日記」より)

この日記の文章は、「学ぶ」とはどういうことかを私たちに問い直してくれている気がします。なぜ彼女は寂しい気持ちを抱いたのでしょうか。学び手である子どもにとって、「わかる」ことは喜びではないのでしょうか。

私たちの研究は、「どのように教えるか」という、よりよい教え方を生み出す研究ではなく、学び手である子どもの立場に立って、教科や学びのあり方について考えるものです。その中で、「教科で人間を育む」という理念に基づき、教科で学んだことが自分自身のものとなり、その後のふるまいや生き方までも変えるような人間形成に寄与する学びを大切に、長年にわたり実践研究を行ってきました。

本年度、私たちは、「学びをひらく契機」を研究主題に据えました。前研究では、子どもが学びを自覚する姿を多く見とることができましたが、その要因については、明らかにすることはできませんでした。そこで、本研究では、「学びの自覚に至る過程で、学びをひらく子どもの中に何が起きているのか」を明らかにしていきたいと考えています。

その中で、その過程には、子どもの「わかれようとする」姿があるように思われます。「わかれようとする」ことは、「わかっていない」と「わかっている」の間に存在します。そのため、「わかっている」に至った際に、「わかれようとする」ことは終わってしまいます。もしも、「わかれようとする」ことの中に、感情や熱量といった何か子どもを突き動かすものがあるのだとしたら、冒頭の日記にあった、難しい漢字が書いてしまったときの寂しさも、なんだかわかるような気がするのです。

では、「わかっている」に至ったとき、本当に「わかれようとする」ことは終わりなののでしょうか。そもそも「わかれようとする」とはどういう姿のことを言うのでしょうか。本研究「学びをひらく契機」において、授業実践や授業分析、教育研究協議会でのみなさんとの協議を通して、どのようなことを見いだしていけるのか楽しみでなりません。

つまり、私たちもまた、「わかれようとし」ているのです。



令和8年度 教育研究協議会のご案内

研究主題

学びをひらく契機 ―わかれようとする子ども―

講師 益川 弘如 先生

青山学院大学教育人間科学部
教育学科教授



期 日 令和8年10月30日(金)

会 場 静岡大学教育学部附属静岡中学校

内 容 公開授業、教科別協議、講演

※開催の詳細につきましては、9月の二次案内にて改めてご案内します。



〒420-0856 静岡県静岡市葵区駿府町1番86号

TEL 054-255-0137 FAX 054-252-7335

E-mail osizuchu@shizuoka.ac.jp

URL <https://fzk.ed.shizuoka.ac.jp/shizuchu/>

HPには、教育研究協議会のお知らせや、日頃の授業のようすなどを掲載しています。ぜひ、ご覧ください。

